



TITLE:

戸田博士と大阪市労働調査事業

AUTHOR(S):

關, 一

---

CITATION:

關, 一. 戸田博士と大阪市労働調査事業. 經濟論叢 1924, 18(4): 860-862

ISSUE DATE:

1924-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128144>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 四 號      第 十 八 卷

大正三十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

## 論 叢

虞夏書に見<sup>は</sup>れたる政治經濟思想

法學博士 田島 錦治

階級の動學的考察

文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論

文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて

法學博士 山本美越乃

## 時 論

不景氣と租税

法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

一子相續制度に就いて

經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展

經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

戸田博士逝く

○戸田海市君の追懷(西田幾太郎)

○戸田博士を憶ひ

て(福田徳三)

○戸田君の追懷(神戸正雄)

○追憶の斷片(河上肇)

○戸田

博士と私(河田嗣郎)

○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎)

○戸田博士と大阪

市労働調査事業(關 一)

戸田博士と大阪市労働  
調査事業

關

一

私が故戸田博士と交を辱うしたのは十數年前

からであつて、其の學識と人格には常に畏敬した所であるが、特に本誌に掲載を乞はんとすることは、故博士と大阪市の勞働調査事業との關係である。

大正八年の始め頃、戰時中の好況と共に勞働問題が漸く世人の注意を惹くこととなり、各地に勞働調査會と云ふ様な名稱の下に委員組織の調査を開始したのもも尠くなかつた。併し私は從來本邦の委員組織の調査會が十分に其の目的を達した實例の尠きことを考へて、將來の參考となるべき根據ある資料を蒐集すべき組織を、大阪市に設けたいと考へ、故博士を白川村の自邸に訪ねて博士の所見を質し、その結果として博士の立案せられたるものが、當時の調査係（後の勞働調査課、現今の大阪市社會部調査課）の調査事業であつて、爾來博士は其の逝去に至るまで、五年以上に亘つて本市囑託として該事業に携はられた。其の間、博士は調査の方針を授け、調査の結果に就ても親しく閲讀の勞を取られ、調査に従事せる吏員を啓發せられたところ

ろが尠くなかつたのである。今日迄公刊せられた大阪市の勞働調査報告二十數卷中、特に生計調査、工場勞働雇傭關係調査、餘暇生活の研究、朝鮮人勞働者問題及日傭勞働者問題等の完成は、全く博士の懇切叮嚀なる指導の結果である。

博士の指導振りは實に熱心を極めたもので、博士は近年多く病床に居られた爲め、屢々市吏員は自邸を訪問して指導を受けたが、何時も今日は餘り聲が出ないからと前置しながら、少し氣分がよいと二時間も三時間も諄々と調査上の注意を述べられるので、其の爲め發熱されはしないかと訪問した吏員などはよく冷々したさうである。そして若し言ひ残されたことがあると、態々玄關まで見送つた上靴を履いてる吏員に向つて低い弱い聲で納得の行くまで繰返し／＼注意があつたのみか、時によると其上細字八九頁に亘る注意書様のものを送つて寄越されると云ふ風であつたから、一度博士の門を叩いたものは、一様に博士のこの熱心な指導振りに動かさ

れてゐた。特に病氣のよくなかつた去年六月頃の聲の出なかつた時などは、用紙に鉛筆で細々書き綴つて口答を補はれたこともあるさうで、これ等は尙新な感銘として吏員の頭に残つてゐる。

調査原稿の校閲などもよく博士を煩はしたものであるが、其の都度博士には寝ながらよくもこんなに細々と詳細に書けたものだと思はれる様な符箋を何十枚となく貼付し、或は字句の末までも訂正した上、たとへどんなに大部な原稿でも十日以内には必ず返送して下さると云ふ風

であつた。

思出は二三にしてやまないが、兎に角調査課が今日あの様な成績を挙げ、多少共社會に貢獻するところがあるに至つたのは、全く博士の賜である。従つて博士が調査事業を通じて大阪市に致された功勞は多と云ふべきである。

學者として又人格者として、一世の師表たる博士を失つたことは、單に一大阪市のみの損失でなく、國家のため實に悲みに堪へない次第である。